

中国「紀年」詩考（I）

漢文学教室 塩 見 邦 彦

A. おまえが生まれて間もない日。

秃鷹のように そのひとたちはやってきて
 黒い革靴のふたを あけたりしめたりした。
 ——生命保険の勧誘員だった。

（ずいぶん お耳が早い）
 私が驚いてみせると
 そのひとたちは笑って答えた。
 〈匂いが届きますから〉

顔の貌さえさだまらぬ
 やわらかなお前の身体の
 どこに
 私は小さな死を
 わけあたえたのだろう。

もう
 かんばしい匂いを
 ただよわせていた というではないか。

（吉野弘「初めての兎に」）

B. 子曰、吾十有五而志于學，三十而立，四十而不惑，五十而知天命，六十而耳順，七十而從心所欲不踰矩。

（『論語』爲政篇）

（子曰く、吾れ十有五にして学に志ぎす。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ごう。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず。）

Aは吉野氏の有名な詩「初めての児に」、Bは、これも有名な孔子の自叙伝とも言える『論語』為政篇の文章である。

まず、吉野氏の詩について言えば、氏自身『詩の楽しみ』（岩波書店、1982年刊）の中で、この詩が生まれたいきさつを、以下のように述べられる。

「……私の長女が生まれましたが、間もなく、生命保険のセールスマンがやってきました。私は『ずいぶん、お耳が早い』と驚いてみせました。するとセールスマンは『ええ、商売柄、赤ちゃんの匂いには鼻が利くほうでして——』と答えたものです。セールスマンはもちろん、生まれたばかりの子どもの匂いを芳香のつもりで当意即妙に答えたのですが、生命保険は人間の生命が死と表裏の関係にあることを基礎にした仕組みです。そのときのセールスマンはたぶん、子どもの進学資金のための保険を勧めたのだらうと思いますが、生命保険は普通の預貯金とちがいで、人の死を保険にかける仕組みになっていますから、いやでも人の死を思わせるようになっていきます。おそらくそのためでしょうが、私は自分の子どもに生命を与えたつもりでいたところが、実は死も一緒に与えていたことに気付かぬわけにはゆきませんでした。』^(註1)

ここには、人間が持つて生まれた宿命のようなものが、はからずも吉野弘氏という詩人の眼を通して語られている訳であるが、この世に生を享けた生物は全て、遅かれ早かれ「死」を迎えねばならない。そのような中であって、人間だけが、日々の生活の中で、己の「死」について、あらかじめ予知することができ、「死」が訪れることを自覚することができる生物ということができよう。

Bはあまりにも有名な文章なので贅言を要しないが、実は後世、特に中国の知識人にとって、この『論語』の文章は、我々の予想をはるかに超えて、大きく影響を与えつづけたと言ってよい。Aは日本人の、しかも現代の詩人の眼を通して、人間の「生と死」が語られ、Bは中国人の、しかも古代人の言葉によって「生（と死）」が語られている、と言ってもよかろう。このように現代と古代、日本と中国という、いわば時空を異にする中であって、「死」をめぐる問題は、人間そのものの根源を規定する大きな側面と言えるのであるが、以下、ここでとりあげようとする中国の「紀年」詩、つまり年齢を詩句に詠み込んだ詩、の様相は、どのようなものなのであろうか。以下にまず、中国の詩における通史的な「紀年」詩の特色を、ごく大ざっぱに見ていこうと思う。

二

上述したように、この章では、各時代毎の「紀年」詩の様相を、ごく大まかに述べ、詳細は次回以後にとりあげる予定の各時代の「紀年」詩の論考に譲る事とする。それ故、ここでは今までの調査から気づいた点をいくつか挙げるにとどめる。

1. 六朝・唐代の「紀年」詩

逯欽立校輯『先秦兩漢三國兩晉南北朝詩』・『全唐詩』を通覧して、六朝・唐代における「紀年」詩の特徴を簡単に述べるならば、まず第一に、唐代の「紀年」詩と比較して、六朝詩においては、「紀年」詩の詩数が圧倒的に少ないと言うことである。そして、その圧倒的に少ない六朝の「紀年」詩の中で、一番多く「紀年」詩を残した詩人は陶淵明（365?～427）である。その他は、ごくわず

かの詩人による「紀年」の詩句が存在する程度で、まず、このことを確認しておきたいと思う。いま、その淵明の「紀年」詩のみを挙げておこう。

- | | | |
|-------------------|--|---------------|
| (1)是時向立年
志意多所恥 | 是の時 立年 <small>なんな</small> に向んとし
志意 恥ずる所多し | (飲酒二十首, 其十九) |
| (2)自我抱茲獨
僂俛四十年 | 我 茲 <small>こ</small> の独を抱きてより
僂俛たり 四十年 | (連雨獨飲) |
| (3)奈何五十年
忽已親此事 | 奈何 <small>いかん</small> ぞ 五十年
忽 <small>たちま</small> ち已に此の事を親 <small>した</small> しくす | (雜詩十二首, 其六) |
| (4)結髮念善事
僂俛六九年 | 髮を結びてより善事を念 <small>おも</small> ひ
僂俛たり 六九年 | (怨詩楚調示龐主簿鄧治中) |

(1)の詩は「立年」即ち三十才に近い頃の作であり、(4)の詩は五十四才の時のものである。(1)(2)(3)が『論語』をふまえていることが判れば、充分であろう。

六朝・唐代の「紀年」詩の特徴の第二は、では六朝・唐代を通じて、一番多く「紀年」詩を残した詩人は誰であろうか？ 白居易(772~846)である。全唐詩中の「紀年」詩の、実に半数以上を占める比率で、白居易は「紀年」の詩句を残していると言える。特徴の第三は、これは既に一章でも触れたが、やはり『論語』為政篇の三十才から七十才までの、十年毎の節目に「紀年」詩が詠われている場合が、圧倒的に多い、ということが出来る。この点に関して言えば、陶淵明も白居易も例外ではなく、いかに当時の知識人が、この『論語』為政篇の一章に大きく影響されていたか、ということを側面的に物語っていよう。いま、詳しく見る暇はないが、白居易詩の中で、代表的な詩句を見てみよう。

- | | | |
|-----------------------|--|--------------|
| (1)三十氣太壯
曾中多是非 | 三十 氣太壯なるも
曾中 是非多し | (白雲期黃巖下作) |
| (2)況我今四十
本來形貌羸 | 況 <small>いは</small> んや我 今四十
本来 形貌羸る | (白髮) |
| (3)青山舉眼三千里
白髮平頭五十人 | 青山眼を挙げれば三千里
白髮 平頭 五十の人 | (登龍尾道南望廬山舊隱) |
| (4)六十河南尹
前途足可知 | 六十 河南の尹たり
前途 知るべきに足れり | (六十拜河南尹) |
| (5)同喜同年滿七旬
莫嫌衰病莫嫌貧 | 同じく喜ぶ同年の七旬に満つるを
衰病を嫌ふことなかれ貧を嫌ふことなかれ | (偶吟自慰兼呈夢得) |

以上挙げた三点が、六朝・唐代の「紀年」詩の主な特徴と言えるが、その他にもさまざまな詩人たちの「紀年」詩を相当数目睹することができる。それらについては稿を改めて述べることにするため、ここではその特徴的な事象を指摘するにとどめたい。

II. 宋代の「紀年」詩

宋代においては、『先秦兩漢三國兩晉南北朝詩』や『全唐詩』のように、宋詩を集大成した書物が存在する訳ではない。^(註2)それ故、宋代の詩を通覧するためには、個人の別集に当る以外にはなく、又それら個人の別集が全て印刷されて刊行されている訳でもない。以上のような事情から、宋代の「紀年」詩については、できる限りの詩集（別集）に当り、その範囲で言えることについて述べることを、最初におことわりしておきたい。

さて、宋代の「紀年」詩の特徴はどのようなものであろうか。

まず、第一に、宋代で最も多く「紀年」詩を残した詩人は陸游（1125～1210）である、ということである。陸游は八十六才という天壽を全うしたこともあり、晩年になるに従って多くの「紀年」詩を残した詩人である。いま、そのいくつかを見ておこう。

- | | | |
|-----------------------|--------------------------------|----------------|
| (1)五十未名老
無如衰疾何 | 五十 未だ老と名づけず
衰疾 如何ともするなし | (五十) |
| (2)家世無高年
我今六十翁 | 家世に高き年なく
我 今六十の翁 | (送宣書記并寄其兄曇才二公) |
| (3)自驚七十猶強健
采藥歸來見暮鴉 | 自ら驚く七十猶ほ強健なるを
薬を採り帰來して暮鴉を見る | (野興) |
| (4)一日復一日
遂作八十翁 | 一日また一日
遂に八十の翁となる | (雜興) |

第二に指摘できることは、宋代を代表する文学、詞の中に、「紀年」句が存在するという点である。唐代の詩人達の中にも詞を残している詩人もいるが、唐代の詞には「紀年」の詩句は存在しない。しかしながら、宋代に入ると、五言や七言の定型詩は勿論、詞とよばれるジャンルにも「紀年」の詩句を詠み込む詩人が現われる。そして、このことは、実は何もこと改めて指摘する程のことではない、と思われるかも知れないが、後世、清代の詞ではほとんど全く現われない、ということからも、宋・元・明代にのみに現われる特徴ということができ、その先鞭を宋代の詩人達がつけた、と言えそうである。以下、詞に現われる「紀年」句の例を少しだけ見ておこう。

- | | | |
|------------------|----------------------|-----------|
| (1)風光緊急
三月俄三十 | 風光 緊急にして
三月 俄かに三十 | (朱淑真 清平樂) |
| (2)笑塵埃 | 塵埃を笑ふも | |

三十九年非 長為客	三十九年の非 長へに客となれり	(辛棄疾 滿江紅)
(3)吾生四十漸知非 祇思青篋笠 江上雨霏霏	吾が生四十 ^{ようや} 漸く非を知る 祇だ思ふ 青篋笠 江上の雨 霏霏たり	(王以寧 臨江仙)

第三に、これは直接「紀年」詩と関係がない、とも言えるのであるが、或る個人の現存する詞がほとんど全て「壽詞」であり、しかも「生日」を詠う詞であるという現象が、宋代では存在する、ということである。具体的にいま、名前を挙げるとすれば、魏了翁(1178～1237)・劉克莊(1187～1269)の詞のほとんどは、「生日」か「生日」にちなんだ壽詞ということである。このような現象を一体どう説明すればよいのであろうか。この点も、後に詳述したいと考えているが、いま、いくつかの詞題を挙げて、宋代の詞にそのような特徴がある、とだけ指摘するにとどめておきたい。

魏了翁詞題 楊崇慶_熹生日(蝶戀花)
婦生朝李倅_□同其女載酒為壽用韻謝之(水調歌頭)
安大使_丙生日(水調歌頭)
生日謝寄居見任官載酒_{三十七歲}(木蘭花慢)
鄭倅_{子美}生日(虞美人)

劉克莊詞題 漢宮春_{癸亥}生日
漢宮春_{吳侍郎}生日
念奴嬌_{丙午鄭少師}生日
解連環_{戊午}生日
木蘭花慢_{癸卯}生日

第四に、第三で指摘したことと、多少かかわるが、宋代の後半あたりから顕著になり始め、金・元・明・清と、時代が降るに従って、明確なパターン化が目立つ現象として、「紀年」を詠う場合に、決った「場」の設定が、この宋代後半あたりから兆し始めるということである。「紀年」を詠う場合、唐代及び宋代前半では、それ程顕著な現象とも思えないが、どうも宋代の後半を界として、「生日・大晦日・元旦」という、三つの場面での「紀年」詩の傾向が著しくなってくるように思われる。つまり、唐代及び宋代の前半では、「紀年」詩は、自己が年齢に対して、或る種の感慨を憶える(憶えた)時に制作される場合が普通であるのに、宋代後半あたりからは、前述したように「生日」か「大晦日」か「元旦」といった、いわば誰しもが自己の年齢に対して、或る種の感慨を憶える、その最も憶えやすい「日」の設定というパターンが増大するように思われる。これについても後に詳述したい。

III. 金・元代の「紀年」詩

金代及び元代は、異民族支配ということと関係があるのかも知れないが、「紀年」詩全体から見れば、それ程多いという訳ではない。幸い『全金詩』によって金代の詩を通覧することができるので、

それに従ってみてみると、第一に、金代で一番多い「紀年」詩作家は元好問（1190～1257）であると言えるであろう。第二に、異民族支配ということと関係するのかも知れないが、金代の「紀年」詩は『論語』為政篇の規定にあまり左右されていない、ということが出来る。以下に元好問の「紀年」詩のみを挙げてみるが、それを見れば、そのことが証明されるであろう。元好問の如き、当代一流の詩人からしてそうなのであるから、他はおして知るべし、である。

- | | | |
|-----------------------|---|-----------------|
| (1)三十七年今日過
可憐出處兩蹉蛇 | 三十七年 今日過ぐ
憐むべし 出處 <small>あた</small> つながら蹉蛇たり | (除夜) |
| (2)三十九年何限事
只留孤影伴黄昏 | 三十九年 何限の事
只だ孤影を留めて 黄昏を伴はん | (長壽山居元夕) |
| (3)四十舉兒子
提孩聊自誇 | 四十にして兒子を挙げ
提孩 聊か自ら誇る | (阿千始生) |
| (4)四十二年彈指過
却疑行處是前生 | 四十二年 彈指に過ぐ
却って疑ふ 行く處是れ前生かと | (濟南雜詩五首，其一) |
| (5)四十九年堪一笑
昨非今是可憐生 | 四十九年 一笑に堪ふ
昨は非 今は是 憐むべし | (和仁鄉演太白詩意二首，其二) |

金代の「紀年」詩に比べ、元代のそれは、何と説明してよいか、はなはだこまるのであるが、『論語』為政篇の影響を色こくうけて、三十から七十までの、夫々の区切りの十年に、集中して多く現われるという傾向を持つ。元王朝に帰順した漢人が多く詩を残したことの、一つの現われかも知れないが、このような現象をどう説明すればよいであろうか。この件に関して、現在、説得的な説明を持ち合せていない。稿を改めて金、元代の詩について詳述する際に、改めて問題にしたいと思っている。

IV. 明代の「紀年」詩

明人の「紀年」詩について言えば、長壽で卒した文徵明（1470～1559）が、その晩年、集中的に「紀年」詩を残しているが、その他は高啓（1336～1374）、唐寅（1470～1523）、李夢陽（1472～1529）、湯顯祖（1550～1617）、袁宏道（1568～1610）、王世貞（1526～1590）といった、いわゆる明代文人の詩に多く、詩にも詞にも現われるのが特徴と言えよう。他の時代のように、特に多いという詩人はなく、強いて多い詩人を挙げるとすれば、高啓、唐寅位であろう。明代も「生日・大晦日・元旦」で「紀年」詩を詠うというパターン化が目立ち、それらの中にあつて、湯顯祖・袁宏道などは、そのようなパターン化した詩題の「紀年」詩も多少有るものの、そこから抜け出し、「間居雜題」とか「看梅」という、上述のような詩題とは全く別の所で「紀年」詩が詠まれているのを見ると、さすがに一代の文藻と言うべきであろう。

V. 清代の「紀年」詩

清一代、約三百年の中で、一番多く「紀年」詩を残した人物は査慎行(1651~1728)であろう。査慎行の詩は、現在、我々が目睹する詩数も非常に多いが、時代が降るに従ってパターン化する、いわゆる「生日」等に年齢を詠むという傾向からも抜け出ている。この点、清代では次に多くの「紀年」詩を残したと思われる程先貞(1607~1673)や方丈(1612~1669)達のパターン化した詩題とは、際立った対称をなしていると言えよう。いま、その査慎行と程先貞の二人の具体的な例を、同一年齢を詠った詩題の所でみてみよう。

- | | | |
|-----------------------|---------------------------------|-------------------|
| (1)我今過四十
貌作山澤臞 | 我 今四十を過ぐ
貌は山沢の臞と作る | (査慎行 抜白詩) |
| 荏苒年光逾四句
家園又見歳時新 | 荏苒たり 年光四句を逾ゆ
家園また見たり歳時新なり | (程先貞 丁亥元日呈南村先生) |
| (2)三年奏牘困方朔
五十吟詩笑高適 | 三年牘を奏し 方朔を困ませ
五十詩を吟じ 高適を笑ふ | (査慎行 題鄒毅仁書劍圖) |
| 寄語良朋能惠我
願聞四十九年非 | 語を寄す 良朋能く我を恵み
願わくは四十九年の非を聞かん | (程先貞 乙未元日) |
| (3)顛毛白後無多許
花甲周來第一春 | 顛毛白後 多許なく
花甲周來す第一春 | (査慎行 庚寅元日試筆戲效樂天體) |
| 浮生回首六句過
草草光陰欲奈何 | 浮生回首 六句過ぎ
草草たる光陰奈何せんとす | (程先貞 丙午歲杪擬明歲元日…) |
| (4)童時了了記觀河
六十三年忽已過 | 童時了了として觀河を記すも
六十三年 忽ち已に過ぐ | (査慎行 殘冬展假病榻消寒…) |
| 年華七九過
元日意如何 | 年華 七九 過ぎ
元日の意 如何 | (程先貞 庚戌元旦) |

以上の如くであるが、(3)の詩例のように、査慎行の詩にも「元日」に詠った詩がない訳ではない。査慎行は長壽であったこともあり、七十才を過ぎてからは、集中的に「紀年」詩を残している詩人である。これらの詩句を読むと、人間というものは、つくづく年を重ねるに従って、年齢が気になるものらしい。それにしても査慎行は、先ほど述べたパターン化から抜け出しているという特色を、最晩年までつらぬいた詩人であった、と言えよう。

第二の清代の特徴として、「詞」は清代でも多く詠まれているが、宋代の「紀年」詩の条で述べた如く、詞の中に自己の年齢を詠む詞は全くといってよい程存在しない。これは宋代の詞と大きな違いである。

以上、六朝期から清代末まで、西暦で言えば三世紀後半から二十世紀初頭までの、約1600年余の間に、中国で詠まれた「紀年」詩を対象に、各時代毎の特徴を概観した訳であるが、中国の詩人達にとって、自己の年齢を自作の詩中に詠み込むということは、どのような意味を持っていたのであろうか。或る詩人にとっては「人生鮮百歳、只有名常存」（人生百歳鮮し、只だ名は常に存することあり：清・馬維翰「九折坂」）と詠うように、名を残せばそれでよいと考えていたらしい人物もあれば、「人生少至百、每懷多憂慮」（人生百に至ること少し、毎に多くの憂慮を懐く：金・元好問「雜著五首、其三」）のように、人生そのものを憂慮と考えていたらしい人物もある。恐らく、このあと四・五回を要して、各時代の「紀年」詩を詳述する際に、これらのことについても触れていきたいと考えている。

最後に、これらの「紀年」詩を検索した参考文献を時代順に挙げ、ひとまず筆を擱くこととする。

参考文献

- 六朝 逯欽立校輯『先秦兩漢三國兩晉南北朝詩』（1983年・中華書局）
- 唐 『全唐詩』（1979年・中華書局）
 竺常撰『全唐詩逸』（1979年・中華書局）
 王重民・孫望・童養年輯録『全唐詩外編』上・下（1982年・中華書局）
 林大椿輯『唐五代詞』（1976年・商務印書館）
 楊家駱主編『全五代詩』上・中・下（1973年・鼎文書局）
- 宋 吳之振・吳留良・吳自牧選『宋詩鈔』一～四（1986年・中華書局）
 唐圭璋編『全宋詞』一～五（1986年・中華書局）
 陸游撰『陸游集』一～五（1976年・中華書局）
 陸游撰『放翁詞編年箋注』（1981年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 蘇軾撰『蘇軾詩集』一～八（1982年・中国古典文学基本叢書・中華書局）
 蘇轍撰『蘇轍集』一～四（1990年・中国古典文学基本叢書・中華書局）
 蘇轍撰『樂城集』上・中・下（1987年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 蘇洵撰『嘉祐集』（1958年・国学基本叢書・商務印書館）
 歐陽修撰『歐陽修全集』上・下（1986年・中国書店）
 范成大撰『范石湖集』上・下（1981年・上海古籍出版社）
 文天祥撰『文天祥全集』（1985年・中国書店）
 蘇舜欽撰『蘇舜欽集』（1981年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 梅堯臣撰『梅堯臣集編年校注』上・中・下（1980年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 張耒撰『張耒集』上・下（1990年・中国古典文学基本叢書・中華書局）
 陳與義撰『陳與義集』上・下（1982年・中国古典文学基本叢書・中華書局）
 王安石撰『王文公文集』上・下（1974年・上海人民出版社）
 王令撰『王令集』（1980年・上海古籍出版社）
 楊萬里撰『誠齋集』（1975年・台湾商務印書館）
 朱敦儒撰『樵歌』（1958年・文学古籍刊行社）
 石介撰『徂徠石先生文集』（1984年・中華書局）
 張景星・姚培謙・王永祺編『宋詩別裁集』（1975年・中華書局）
 黃庭堅撰『山谷詩集』（昭50年・和刻本漢詩集成第14輯・汲古書院）
 陳與義撰『簡齋詩集』（昭51・和刻本漢詩集成第15輯・汲古書院）

- 曾幾撰『茶山集』(昭51年・和刻本漢詩集成第15輯・汲古書院)
 劉應時撰『頤庵居士集』(昭51年・和刻本漢詩集成第15輯・汲古書院)
 高翥撰『菊磎詩集』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
 嚴羽撰『嚴滄浪先生詩集』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
 劉克莊撰『後村詩鈔』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
 方岳撰『秋崖詩鈔』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
 眞山民撰『眞山民詩集』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
 林逋撰『和靖先生詩集』(昭51年・和刻本漢詩集成第11輯・汲古書院)
 秦觀撰『淮海集鈔』(昭51年・和刻本漢詩集成第11輯・汲古書院)
 任淵撰『后山詩註』(昭51年・和刻本漢詩集成第14輯・汲古書院)
 鄭思肖撰『所南翁一百二十圖詩集』(昭51年・和刻本漢詩集成第16輯・汲古書院)
- 金 『全金詩』一～二(1968年・新興書局)
 『全金元詞』上・下(1979年・中華書局)
- 元 顧嗣立編『元詩選』初集上・中・下,二集上・下,三集(1987年・中華書局)
 張景星・姚培謙・王永祺編『元詩別裁集』(1975年・中華書局)
 薩都拉撰『雁門集』(1982年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 陳乃乾輯『元人小令集』(1958年・古典文学出版社)
 楊載撰『楊仲弘詩集』(昭52年・和刻本漢詩集成第17輯・汲古書院)
- 明 沈德潛・周準編『明詩別裁集』(1975年・中華書局)
 全明詩編纂委員會編『全明詩』一(1990年・上海古籍出版社)
 龍榆生編選『近三百年名家詞選』(1956年・上海古典文学出版社)
 卓爾堪選輯『明遺民詩』(1960年・中華書局)
 湯顯祖撰『湯顯祖詩文集』上・下(1982年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 袁宏道撰『袁宏道集箋校』上・中・下(1981年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 歸有光撰『震川先生集』上・下(1981年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 憑惟敏撰『海浮山堂詩稿』(1981年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 陳子龍撰『陳子龍詩集』上・下(1981年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 高啓撰『高青丘集』上・下(1985年・中國古典文学叢書・上海古籍出版社)
 李東陽撰『李東陽集』(1984年・岳麓書社)
 劉基撰『誠意伯詩鈔』(昭52年・和刻本漢詩集成第17輯・汲古書院)
 唐寅撰『唐伯虎集』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 文徵明撰『文衡山先生詩鈔』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 王守仁撰『王陽明先生詩鈔』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 謝茂榛撰『謝茂榛山人詩集』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 王世貞撰『弇州詩集』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 李言恭撰『白雪齋詩集』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 徐燊撰『鼇峰絕句鈔・田園雜興』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
 張楷撰『蒲東崔張珠玉詩集』(昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院)
- 清 徐世昌輯『晚晴移詩匯』上・下(詩歌總集叢刊清詩卷・1988年・上海三聯書店)
 鄧之誠撰『清詩紀事初編』上・下(1965年・中華書局)
 王昶輯『湖海詩傳』上・下(1958年・國學基本叢書・商務印書館)
 沈德潛編『清詩別裁集』上・下(1975年・中華書局)
 葉恭綽編『全清詞鈔』上・下(1982年・中華書局)

- 方苞撰『方苞集』上・下（1983年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 吳偉業撰『吳梅村全集』上・中・下（1990年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 黄景仁撰『兩當軒集』（1983年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 吳嘉紀撰『吳嘉紀詩箋校』（1980年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 錢謙益撰『牧齋初学集』上・中・下（1985年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 查慎行撰『敬業堂詩集』上・中・下（1985年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 丘逢甲撰『嶺雲海日樓詩鈔』（1982年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 黄遵憲撰『人境廬詩草箋註』上・中・下（1981年・中国古典文学叢書・上海古籍出版社）
 鄭燮撰『鄭板橋集』（1962年・中華書局）
 唐甄撰『潛書』（1963年・中華書局）
 龔自珍撰『龔自珍全集』（1975年・上海人民出版社）
 魏源撰『魏源集』上・下（1976年・中華書局）
 汪子豆輯『八大山人詩鈔』（1981年・上海人民美術出版社）
 卞孝萱編『揚州八怪詩文集』（1985年・江蘇美術出版社）
 顧炎武撰『顧亭林詩文集』（1963年・世界書局）
 洪昇撰『稗畦集・稗畦統集』（1957年・古典文学出版社）
 汪蔚林編『孔尚任詩文集』第一冊～第三冊（1962年・中華書局）
 曹寅撰『棟亭集』上・下（1978年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 周亮工撰『賴古堂集』上・下（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 唐孫華撰『東江詩集』（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 金農撰『冬心先生集』（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 黄鶯來撰『友鷗堂集』（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 方丈撰『龕山集』上・中・下（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 朱彝尊撰『騰笑集』（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 朱鶴齡撰『愚庵小集』上・下（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 孫枝蔚撰『溉堂集』上・中・下（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 陳夢雷撰『閱止書堂集鈔』（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 納蘭性德撰『通志堂集』上・下（1979年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 汪懋麟撰『百尺梧桐閣集』上・中・下（1980年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 汪懋麟撰『百尺梧桐閣遺稿』（1980年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 顧汧撰『鳳池園集』上・下（1980年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 王楙撰『蘆中集』（1981年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 程先貞撰『海右陳人集』（1981年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 徐作肅撰『偶更堂集』（1982年・清人別集叢刊・上海古籍出版社）
 高士奇撰『高江邨集鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第18輯・汲古書院）
 蔣士銓撰『忠雅堂詩鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 袁枚撰『隨園詩鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 袁枚撰『隨園絕句鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 王文治撰『王夢樓絕句』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 趙翼撰『甌北詩選』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 張問陶撰『船山詩草』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 蔡雲撰『蔡雲吳歙鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 陳文述撰『陳碧城絕句』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）
 陳鴻詰撰『味梅館詩鈔』（昭52年・和刻本漢詩集成第20輯・汲古書院）

註(1) 吉野弘著『詩の楽しみ』（1982年・岩波書店・191頁）

註(2) 最近、北京大學古文獻研究所編による『全宋詩』が、向う5ヶ年計画で発行予定ときくが未見。

附記 篆刻の側から「紀年」について解説したものに以下のものがあり、多大な裨益を受けた。この場をかりて深く感謝したい。

專輯解説—紀年印——北川博邦著 (『篆刻』 No. 5, 昭59, 東京堂出版)

專輯解説—紀年印(二)——北川博邦著 (『篆刻』 No.10, 昭60, 東京堂出版)

專輯解説—紀年印 (年齢) —北川博邦著 (『篆刻』 No.15, 昭61, 東京堂出版)

生日印解説 北川博邦著 (『篆刻』 No.16, 昭62, 東京堂出版)

(1991年 8月31日受理)

